

初期大乘經典における菩薩

相馬 一 意

初期大乘經典を厳密に判定することは簡単にはいかぬ問題だが、一応便宜的に西晋（竺法護の訳経時代）以前に漢訳されたことのある經典を対象として、經典の中に描かれた菩薩の姿及び菩薩行等について明らかにしようとするのが研究の目的であり、特に本論においては、宝積部に属する一部の經典について論じるものである。

第一に、善順菩薩。この菩薩は大宝積経第二十七善順菩薩会の主人公である（異訳の白延及び支施耑の訳では須頼菩薩と呼ばれる）が、彼は一応在家者の姿で描かれている。それは彼が五戒や八齋戒を保っているとか舍衛城中の極貧者とされていることから理解できる。しかし彼は、天帝釈の誘惑によっても決して瞋恚の心や殺害心を起すことなく不与取を犯さず妄語せず姪意を生ずることもない。菩提流志訳ではこの善順が過去無量仏所において種々の善根を積んだ人として考えていることからしても、ただ単なる在家者にはとどまらない。

さらに、仏がこの善順菩薩に証明を与えるところに菩薩の

特色が述べられており、白延と支施耑訳では六種の四法及び菩薩将徒、流志訳では三無量功德資糧・三十二法・菩薩眷属という形で説かれている。それぞれの項目数や内容には可成の相違が見られるが、共通点をあげれば、(1)発菩提心、(2)六波羅蜜、(3)四無量心、(4)住阿蘭若等が考えられる。そしてこれらの徳目が善順菩薩にはすべてそなわっているので、彼が作仏するのは必然である。彼に対する釈尊の授記の記述は流志訳には欠けているが、古い二つの訳にはあり、先のごとく流志訳においては善順菩薩が過去世に無量の仏を供養して不退転を得ているのであるから、たとえ授記の記述がなくとも善順は授記せらるべき存在だと考えてよい。

このようにみても、本経における菩薩は表面的には在家者のようだが、必ずしもそのように決定できない。あくまで授記せらるべき徳目をそなえた高德の修行者であり、作仏することが確定しているものという本来的な菩薩として立ちあらわれている。したがってまた、このような菩薩観に裏打

ちされた修行者は多分に出家主義的である。

皆発無上正真道意 一切捨欲以家之信 離家為道欲作沙門(白延
訳、大一二・五六下)

皆発無上正真道意 捨家財業 欲於世尊之化捨家人道 会中三百
人 其余皆現為比丘僧(支施耑訳、大一二・六三中)

という文、流志訳の三十二法の第二十二常樂出家等の記述から明らかである。

第二には、大宝積経第二十八会及びその相当経の考える菩薩についてである。この経の主人公は長者であり、これも在家者として描かれている。しかしまた、この長者は最後に仏の授記を受けて作仏する存在であって菩薩であること疑いない。

舍衛国の長者勇猛授(流志訳。白法祖訳は威施、施護訳は無畏授)等が大乗に志願して仏の所へ来て、菩薩の行を問う。これに対して仏が菩薩の学ぶべきところ修行すべきことを答える。この問に対する世尊の答によれば、大悲心を起すこと、六波羅蜜を行すること等が菩薩の修行である。しかしこのよるな行のためには身体・妻子・財産等に対する執着を断ずる必要がありそのためにはどうしたらよいかという問に対して、仏は自分の身体の嫌悪すべきこと四十四種(白法祖訳は四十二種)に観すべきことを教えている。したがってこれも菩薩の修行項目となる。この点が他の經典からみて本経の菩

薩行の特色であろう。

先の善順菩薩の例と較べて本経の菩薩の姿をまとめてみると、住阿蘭若についてだけは何等言及するところがなく、身体を観する点が本経の特色だが、それ以外はすべて同じと言つてよい。発菩提心は、「菩薩大士發行 欲応無上正真等最覺者(白法祖訳、大一二・六四上)、菩薩摩訶薩 於阿耨多羅三藐三菩提 勝志樂者(流志訳、大一一・五四〇下)」とあるように言わずもがなであり、出家的性格も同じようかがある。最後に仏が教えを偈にして説いているところの「在家熾然為苦本」とか「応速捨利居家縛」とかの句によって一目瞭然である。先に触れた授記のところには、この長者が過去世に無量の仏を供養し種々の善行をなしたことが述べられており、この点でも、同様である。

第三は妙慧(竺法護・羅什訳とも須摩提)菩薩。この菩薩は大宝積経第三十会及びその相当経の主人公である。王舎城の長者(竺法護訳によれば郁迦)の女である。そして年齢は八歳とされているからこの菩薩も在家者の姿をしているが、先の二経と同様これは仮の姿であって、後に仏によって本来の姿が明かされる。それによれば、過去三十劫(竺法護訳では三十億劫)の昔にすでに発心し文殊の発心の時の師であるという。したがって当然に、仏によって将来作仏の授記がなされる。

そしてこの妙慧の十項にわたる間に答える形で仏によって四種ずつ計四十の菩薩行が説かれる。それをまとめとめてみると、六波羅蜜の語はないがそれに当る一々の行が説かれ、これらを中心とした諸善を不断なく行うことが教えられている。ただ本經では、仏の形像を造ることと仏塔を供養するところが二回ずつ述べられている点が今までの菩薩行とは異なる点である。また住阿蘭若に関する記述も何もない。それゆえ本經では出家主義的性格があまり見られない。仏塔供養が本来は在家者を中心とするものであったことから当然かも知れないが、このことで菩薩の所行は出家だけのものではなく広く一般に解放すべきことを示したものと言うこともできよう。ただ、妙慧と文殊との問答にみられる空思想の深まり、あるいは仏の形像を造るという記述などからすると、本經は初期大乘經典とは言い難いように思える。

第四は、無畏徳菩薩。無畏徳（仏陀扇多訳。竺法護訳では阿術達あるいは無愁憂）菩薩は、阿闍世王の女で十二歳とされている。したがって、前の妙慧菩薩と同様の設定である。しかしました、この菩薩もこの姿が本体ではない。すでに菩提心を発してから九十億（法護訳は九十二億）仏を供養し善行を積んだ存在であり、やはり積尊によって授記せられ作仏することが確定している。

かような無威徳菩薩の口を通じて、舍利仏目蓮等の諸比丘

達に空思想が説かれるのが大宝積經第三十二会の中心なので、ここで述べられている思想は空思想として非常に発展したものと見えるし、二乗を強く貶める考えもあるから、この經典は初期大乘とは言い難い。がこの菩薩によって八種の菩薩行が説かれるところに今までと多少異なる点が認められるので一言しておきたい。

八種の菩薩行の内容は大悲心・善巧方便・般若の智・勇猛精進等のことさら独特なものはないが、これらが、

菩薩亦無居家 亦無出家 亦無沙門 亦無不沙門（竺法護訳、大一二・八七中）

菩薩成就八種法行故 不得言在家出家（仏陀扇多訳、大一一・五五四中）

と述べられているように、在家出家の区別に意味を認めないという思想と結びついている点が、今までの相違点である。舍利仏の、九十億仏を供養したような菩薩が何故に女身を取るかという疑問に対して、男女の区別などは意味がない、と答えて男子の姿になって見せる記述（大一一・五五五上、一二・八八下）と軌を一にして、大乘思想の深化を示す点であろう。

最後に、大宝積經第三十三無垢施菩薩応弁会及びその相当經の主人公たる無垢施（撰道真訳。竺法護訳は離垢施、瞿曇般若流支訳は得無垢）菩薩についてである。この菩薩も表面は女

性とされている。八歳（竺法護と般若流支の二訳は十二歳）で波斯匿王の女となっている。この菩薩が舍利仏目連等の八大声聞及び文殊觀世音等の八大菩薩と議論してやりこめるのだが、この構成は先の無威徳菩薩の例とほとんど同様であるし、後で仏より授記せられること、遠い過去世に発心してより無量の功徳を積んだ菩薩であると明かされる点も変化がない。

無垢施菩薩の間によって菩薩行が説かれるのが、しかし、本經の中心である。これも四項ずつまとめられ教多くの行が示され、それぞれ偈によってくり返され他の經典と共通の説相がみられるが、この中から主な菩薩行をひろってみると、結局、大悲心・六波羅蜜行等が中心になっている。ただここでは、善巧方便ということが強く出でおらず、般若波羅蜜が六波羅蜜とは別に扱われる点などが他と幾分相違する点か。また、仏塔供養は五回も出るし、仏の形像を造るといふこともある。あるいは、經卷崇拜も出てくるが、これらは本經の菩薩行の大きな特色といえよう。

これだけ仏塔供養が強調されているならば、仏塔供養の性格上当然に出家主義的性格は弱まる。六十以上の菩薩行の中にただ一度だけ「常樂閑静処（撰道真訳、大一一・五六一中）不樂居家志常欲捨（竺法護訳、大一一・九四中）」ということがでるだけであって、大比丘八人及び菩薩八人が八歳の女に問

いつめられて答に窮する趣向からすれば、先の在家出家の区別には意味がないという考えに帰着するであろう。

研究途中ながらこれまでの研究をまとめて本論の一応の結論とする。

以上の大乗仏典に出る菩薩は皆表面は在家者的な姿をしているが、本来の姿は過去世に無量の功徳を積んだ授記せられて作仏する存在である。したがって、そのような菩薩の行は六波羅蜜行を中心として、甚だ困難で、「諸菩薩行甚亦難弁（離垢施女經、大一一・九六上）」等といわれる。それゆえこのような難行をなし得るのは授記せられる存在だけと言ってよく、出家主義的性格も強いものがあつて、「誰でも菩薩」とか「凡夫の菩薩」とかいう菩薩観とは程遠いものである。ただ、仏塔供養の意義が強調されたり、紙数の関係で触れられなかったが、「求菩薩道奉行六度無極 未曉善權方便不如書持是經誦誦轉（須摩提菩薩經、大一一・七八中）」などという文にみられるような經卷崇拜の思想が発展したりして、わずか八歳の童女を主人公にして在家出家の区別は意味がないと教えるように菩薩思想が変化していくのではなからうか。

（龍谷大学講師）